亡き小林昴の父です。今の率直な気持ちを述べます。 まず初めに加害者親子に言いたい。

あなたたち、よその子を死なせたら、真っ先にすべきことがあるんじゃないですか!

裁判で謝罪させられるんじゃなくて、真っ先に、死なせた昴と遺族に謝るべきではないんですか。たとえ断られても、謝って謝って、謝り尽くすべきではないんですか。家に入れてもらえなくても、もし雨が降ってきても、地面に頭をこすりつけて、「もうええ。」と言ってもらえるまで、何度でも、許しを請うべきではありませんか。私があなたたちの立場だったらそうします。それが人の、人の親の、当たり前の姿だと思います。でもあなたたちはまったく違う。裁判になって初めて、毎日手を合わせているとか、毎月花を供えているとか言う。そんな気持ちが本当にあるなら、まず亡き昴と遺族に気持ちを伝えるべきであって、裁判の場で、実はこんなことしてましたなんて言ってほしくない。私はこんなこと、わざわざ言いたくありませんでしたけど、あなたたちには、あえて言わなければならないと感じました。今は言っても伝わらないかもしれませんが・・・。愛する昴が、そんなあなたたちに轢かれて死なされたことが、悔しくてなりません。それが私の、今の素直な気持ちです。

事故のことについて話します。

前回の裁判で見たとおり、事故の動画は異常なものでした。ノーブレーキ。 しかもまっすぐに。加害者は直前に急ブレーキを踏んだと言いましたが、そん な風には見えない。しかもハンドルの回避操作も一切ない。それは異常な光景 です。私はドライブレコーダを何回も何回も見ていますので、その異常さがよ くわかります。そして、事故現場を何度も、加害者と同じスピードで走りまし た。66キロをキープしてあの事故現場を通過する、そのスピード感! ドライブレコーダを見ただけでは、あのスピード感と緊張感は決してわかりません。あの現場は極めて危険な交差点です。以前にも死亡事故があり、近所の少年が亡くなっています。そのことは、加害者の車からも十分に分かるようになっています。黄色の減速帯、横断歩道、カーブミラー、赤い回転灯、子どもの飛び出し表示、バス停などが次々と迫ってきます。交差点の手前から始まるカーブも、とても急です。運転手が普通の状態であれば、あの道で減速しなかったり、目の前を横切ろうとする自転車に気づかないはずがありません。何度走ってもものすごいスピード感でした。しかもあの事故は、朝の通学時間帯でした。

加害者はあの時一体何をしていたんでしょうか。携帯電話の操作とか、何かを取ろうとして前を見ていなかったとか、まともに前を見れないような体調だったとか、そんなことでもない限り、あの運転にはなりませんよ。あなた前回、

「縁石を見ていた」との警察での発言をあっさり覆し、前を向いて運転していた、直前は対向車を気にしていたと言い直しました。その発言を聞いて、私にはより一層、疑問が募りました。前を向いて、対向車を気にしていたにもかかわらず、なぜ、対向車の先で動き始めた昴に気付けなかったのか。あの道、S字カーブですが、事故現場の直前はS字の中間地点で、見通しが良くなっています。ドライブレコーダでは、対向車が去ってからおそらく50メートルぐらいはありました。前を向いて50メートル、約3秒。3秒あれば、自転車に気づけるし減速もできます。なのに、加害者は真正面の昴に気づけなかった。あなた、一体何をしてたんですか?

たとえ裁判が全部終わったとしても、その疑問が晴れない限り、一生、私のこの怒りが収まることはないでしょう。裁判官にお願いです。私たちの意見陳述が終わった後、もう一度加害者に、事故の真相を語る場を設けていただけませんか。今日は、妻も、昴の兄も祖父母も、友人も、そして昴の遺影も見てい

ます。私の疑問と怒りは、私が死んだ後も、この場で見てくれているすべての 方々が受け継いでくれるはずです。

次は、事故の直後私が聞いた話をします。

まず聞いたのは、刑事さんからの、事故直後の加害者の様子でした。それは 四日市病院。昴の緊急手術中でした。

「加害者は、『被害者が左右どっちから出たのかわからない。左だったかもしれない。』と言っていました。」

続けて、

「加害者が『今日は調子悪いんですわ。』と話したので、調子が悪かったら運転したらあかんやないかと諭したんですよ。」

その後刑事さんは警察署で、私に何度もこう言ってくれました。

「ノーブレーキでズドンですわ。ハンドルの回避操作もない。その原因を絶対 に解明しますよ。」

それにもかかわらず、左の縁石を見ていたとの嘘の供述で終わってしまい、 加害者の体調、事故直前の運転行動、薬の影響などについて、厳しく追及して くれなかったことが残念でなりません。

次は、事故後の加害者の対応です。昴が亡くなる前日四日市病院で、加害者は私に対し、「まっすぐ前を向いて、40~50キロで運転に集中していた。」と、同じ言葉を繰り返すだけでした。あの時我が子が脳死状態になっていて、あとどれだけ生きられるかわからないと、必死に説明したにもかかわらず、加害者の答えは、まったく同じでした。不誠実すぎます。

葬儀から約2週間後、保険屋に連れられて加害者はうちに来ました。仏間に 通した直後、最初に「この度はすみませんでした。」と一言言ったきりずっと 黙っていました。私と妻は、保険の手続きを延々と聞かされ続け、結局加害者は仏壇に手を合わせようとしないまま、「では。」という感じで帰ろうとした。だから私は怒ったし、香典も突き返しました。心から謝る気持ちがないのなら、二度と来るなと。

葬儀の後、加害者の中学校時代の同級生が、何人も私に連絡をくれました。 いずれも私とは話したことのない方々です。そして当時の加害者の様子をいろ いろと話してくれました。

中でも、次の発言が印象に残っています。

「あの子が今も運転しとると思うと、ほんと怖い。」

これら、この場で言うべきか迷いましたが、わざわざ私に教えに来てくださったみなさんへの感謝の気持ちから、あえてお話しすることにしました。

母親は第一回の裁判で、加害者は小学校に上がる前、どこかに転落して以降 'どもり'が出るようになり、コミュニケーションが苦手になったと言ってい ました。しかし、この裁判で「コミュニケーションが苦手」「ロ下手」ですべて が片付けられてしまい、それ以上の、運転能力などへの追及が行われていない ことも残念でなりません。

次に、これまでの裁判のことでお話しします。

いきなり第一回裁判で、母親は寬大な処分を求めた。なおかつ運転免許も取らせたいと言った。理由は、自分の生活が不便になるから。だから実刑もやめてほしいと。

母親には、昴が亡くなった後、裁判までの1年2か月以上の間、ただの一回 も会うことはありませんでした。通夜にも葬儀にも来ず、うちにも来ずです。 信じられますか? しかも、息子は大人だ。だからなぜ私が出て行かなければ ならないのかと、さも鬱陶しそうに言いました。あの時の母親の顔、忘れられ ません。私たちの悲しみは、あなたたちの非常識な言動で逆なでされ、心はズタズタにされました。さらに、前回の裁判で母親は、顔を伏せ、事故のドライブレコーダを見ようとはしなかった。しかし親ならば、息子が起こした死亡事故の真相を直視すべきだ。私はとてもつらかったけど、勇気を振り絞って、何度もドライブレコーダを見た。だから、昴の正当性がよくわかった。母親には、事故を直視してから発言してもらいたい。見ないまま何を言っても、真相を知らないままどれだけ謝られても、それは所詮うわべだけに過ぎない。

そして前回の裁判での加害者の様子。事前に暗記したような発言を繰り返すだけでした。質問に答えられなくなると、うつむいて顔を真っ赤にして、ただ震えているだけ。黙ったままでも、済んでいってしまうんでしょうか。許せません。

昴のことを少し話します。

昴は5人兄弟の末っ子。将来を嘱望された野球選手だったことは、第一回の裁判で検察官が説明してくれたとおりです。気は優しく力持ち。中学1年生でしたが、中学硬式野球チームのエースで四番。特にバッティングがすごかった。打球の飛距離がすごかった。私は父親である以上に、スラッガー小林昴の一番のファンだったんだと思います。事故の直前、私と昴は、将来野球で生きていこうと誓い合いましたし、もっともっと練習して、西武の森友哉選手のようなバッターになろうなと約束しました。

昴の長打力は小学校低学年から並外れていましたので、幼い頃から昴にキャッチボールを教え、バッティングを見てきた4人の兄も、私と同じように、将来野球で大成する夢を、末っ子の昴に託していったと思います。

そんな私たち家族の夢が、あの事故で一方的に奪われた。私はまさか、我が 子に先立たれるなんて想像もしていませんでした。この悲しみ、とても言葉で は言い表せません。生きているのがつらかった。

加害者と母親は、死なせた昴のこと、何にも知ろうとしませんでした。私た ち遺族の深い悲しみに寄り添おうともしませんでした。それで許されていいん でしょうか。

昴が亡くなり、私は愛する我が子の死という現実と向き合う中で、人の命ってこんなに尊いものなんだと、改めて思い知りました。だから、一周忌の後、大安公民館で二日間にわたり、昴の生前の写真展を開きました。そこへは、大安中学校の先生・生徒さん、野球のチームメイトと親御さん、そして地域の方々も大勢来てくださり、命の尊さ、そして家族の愛情を感じていただけたと思っています。

加害者と母親は、命の尊さについて、真剣に考えるべきだ。そして、我が子を、我が弟を、我が孫を奪われた、私たち遺族の苦しみ、悲しみを理解しようとすべきだ。写真展のパネルをこの場に持ち込めなかったのが残念です。

次に、処罰感情について話します。

加害者が、あの事故直前50メートルの真相について説明できないとすれば、あの時加害者は、正常な状態ではなかったと考えざるをえない。事故直前の自分の行動についてきちんと説明できない加害者は、なぜ自分が昴に突っ込んだのか、その原因がまったくわかっていない。そんな加害者には、あの母親のいないところで一人、事故の原因についてしっかり考えてもらい、事故のことを深く深く反省してもらいたい。私たち遺族は、加害者と母親の度重なる非常識な言動で、心をズタズタにされました。だから、できることなら、無期懲役を望みたい。でもそれは今の法律上できない。ならば、加害者には絶対に実刑を、最大限に長い実刑を望みます。執行猶予は、絶対につけないでほしい。

運転免許については、二度と取ろうなんて思わないでもらいたい。もし取っ

たら、加害者は必ず同じような事故を起こします。あなたたちを見ていて、私 はそう確信しています。実刑が終わった後、車のない生活に早く慣れ、地域の 方々のために尽くす生活を送ることが、あなたたち親子にとっての幸せにつな がるものと考えています。

最後に、加害者と母親に何点かの頼みがあります。

昴は、自宅側から中学校に向かって交差点を通行していました。登校時間にも余裕がありました。昴が忘れ物をして急いでいたから飛び出した、なんていう噂は、まったくのデマです。しかし、これは昴の名誉にかかわることです。だから、加害者と母親には、今後ドライブレコーダの映像を脳裏に焼き付けて、平成29年3月9日の朝、自分が起こした死亡事故の真相を説明していってほしい。被害者は飛び出してなんかいない。被害者に気づかず、ノーブレーキの状態で突っ込んだ自分が全面的に悪かった。デマを信じてあなたたちと話した方々に、そして大安中学校の先生にも、そうきっちりと訂正してもらいたい。あなたたちには、その義務があるのです。

もう一点は、加害者の母親は、子育ての仕事に携わっていると言っていました。今後もその仕事を続けるのであれば、子どもたちに対して、自分の息子が起こした事故のことを正直に話し、二度と同じような悲惨な事故が起こらないよう、車がいかに怖いものか、安全運転がいかに大事か、教えていってもらいたい。

さらにもう一点。私たち遺族は、今後一生、昴の死と向き合って生きていく ことになります。だからあなたたちも、自分が起こした今回の死亡事故から絶 対に目をそらさず、この先も一生、あの事故の真相に向き合っていってもらい たい。

私は、亡き昴から、自他共の幸福を願う、日蓮仏法の尊い生き方を教わりま

した。私と妻は、その尊い生き方を、生涯実践していく決意です。だから、私たちは、加害者親子の幸福をも願い、加害者親子が、私たち被害者遺族を始め、彼らの縁するすべての方々のことを思いやれる人へと、境涯革命していけるよう、祈り続けてまいります。

これが本当に最後です。

○○さん、どうかお願いです。私たち遺族に、事故の真相を話せるあなたへ と変わってください。一生祈って、待ち続けています。

平成30年7月12日